

## 但馬妙見山採集会 (1963. 8. 19~20) 雑感

越 智 春 美

今回上記採集会に招かれたが、好天に恵まれて参会者が多くてその応待に忙しく、十分な採集も植物名をメモすることもほとんどできなかった。また、コースも名草神社 (約800m) までで、その上方へわき道に入っただけの調査採集もしていない。そんなわけで採集会についての適当な感想などは無理な話である。したがって断片的なことを少しのべてお茶をにごすことにしたい。

○ コケ植物が非常に豊富である。特に石原の西方溪谷ぞいの地域と、名草神社へ行く「石原道」の溪谷や小流沿いの湿ったところがよい。そのようなところにはチョウチンゴケ類 (*Mnium*)、シッポゴケ類 (*Dicranum*)、ホウオウゴケ類 (*Fissidens*)、ヒツジゴケ類 (*Brachythecium*)、オオハリガネゴケ (*Bryum pseudotriquetrum*)、サワゴケ類 (*Philonotis*)、クジャクゴケ

(*Hypopterygium japonicum*) などのセン類やジャゴケ類 (*Conocephalum*)、ケゼニゴケ (*Dumortiera hirsuta*)、クモノスゴケ (*Pallavicinia longispina*) などの葉状苔類が多い。三重の塔付近は中〜乾性のコケ類が多いところで、岩上にはスナゴケ (*Rhacomitrium canescens* var. *ericoids*)、ギボウシゴケ類 (*Grimmia*)、シロヒジキゴケ (*Hedwigia ciliata*)、オオギボウシゴケモドキ (*Anomodon giraldii*) などが多く、岩の間やや、乾く土上にはコバノチョウチンゴケ

(*Mnium microphyllum*)、タマゴケ (*Bartramia pomiformis*)、ミヤマシギゴケ (*Polytrichum alpinum*) などもみられる。上にのべたもののうちクジャクゴケはやや高いところにみられる例であり、ミヤマシギゴケは低く下りすぎているような感じを受ける。その他多くみられるものとしてはシノブゴケ類 (*Thuidium*, 土上、岩上)、オオトラノオゴケ類 (*Thamnum*, 主として岩上、土上) などが、樹皮上にはキンモウゴケ類 (*Ulota*)、ヒラゴケ類 (*Neckera*)、オオギボウシゴケモドキ、ミヤベゴケ (*Miyabea fruticella*) などがみ

られた。日光院の庭にもコケ類が非常に豊富であるが、このようにコケ類が多いことはこの付近が湿度の高いことによるものであろう。妙見山はコケ類の採集地としては非常によい所のように見受けられた。

○ 妙見山によい自然林を育てたい。この山には植林としてのスギ林には見事なものが多いが、自然林のよいものは名草神社の下方にはほとんど見当たらない。約600mぐらいまでのところにはコナラにリュウブや時にはミズナラなどをもまじえた二次林やアカマツ林がかなり多い。ところがそれらにまじってシロダモやウラジロガシなどの常緑広葉樹も認められる。また、300m内外といった低い所にもチャボガヤやハイヌガヤが多いのもこの山の特徴であろう。結局この山の下方はウラジロガシ型の林に、上方はブナ林となるのであろうが、高山の少ない但馬部でこの山は山地の自然林の代表的様相をみるのには最もよい山となるのであろうから、これらの二次林を保護して極相林に移行させたいものである。ここは自然公園法による県立公園なのであって、将来さらに国定公園になることをも望むならば、それにふさわしい国立公園における特別地域、さらには特別保護地区に相当するものを育成したいものである。

兵庫県生物学会は意欲的であり、また、よくまとまっているように感じて喜ばしく、又鳥取県と比較してみてもうらやましくもあった。このようなことは高等学校や中学校の熱心な有志の人々がのぼせ上った天狗にならないで、よく他の人々の世話をされることと、生物教育ないし理科教育が自然に根を生やして行なわれていること、日光院住職のような篤志家がおられて場所や機会を提供されていることなどによるものかと想像した次第であった。それにつけても紅谷会長はじめ地区世話人の方々および日光院のご好意に対して厚くお礼申しあげたい。

鳥取市立川町5丁目1番地 鳥取大学芸学部